

総括

1. 病院の特色

貴院は 1968 年に急性期病院として開設され、地域医療の一角を担ってきた。その後、現在の病院グループに編入され、リハビリテーション専門病院として再出発した。現在は回復期リハビリテーション病棟のみの構成となり、訪問リハビリテーション事業所と指定介護予防リハビリテーション事業所の指定も受けている。また、医療の質向上のために、第三者評価受審にも積極的に取り組まれており、病院機能評価を継続的に受審している。

急性期病院としての病院構造の制約はあるものの、療法士や看護師等の多職種チームが協働して、リハビリテーション評価や生活機能に関する情報の共有と進捗管理などにおいて独自の方法を考案しながら、治療成績を高める工夫を行っている。在宅復帰を目指した入院早期の訪問指導実施や退院後の生活状態の確認など、現在強化中の取り組みも活用し、地域の医療・介護・福祉機関や住民から、さらに信頼される病院へ進化していくことが期待される。

2. 良質な回復期リハビリテーションを提供するための組織運営

病院の理念および基本方針は明文化され、病院の内外に周知されている。一方、回復期リハビリテーションに関する基本方針や運営方針としては、ICF の考えなども参考により具体性を高め、多職種で検討されるとなお良い。病棟を担当する医師 5 名のうち 1 名がリハビリテーション科専門医である。

看護・看護補助者は基準を満たす配置であるが、介護福祉士の配置が充実するとより良い。365 日リハビリテーションを提供するための療法士数が確保されている。

安全管理に関しては、抽出された課題に対するプロジェクトチームが医療安全管理室の下部組織として活動しており、転倒率の減少など具体的な成果をあげている。急変時への対応に関しては適切であるが、今後は多職種合同によるシミュレーション研修の実施を期待したい。病棟ではハード面の制約を運用でカバーし、ADL や障害の種類に合わせた安全な療養環境を提供している。

入院料や疾患別リハビリテーション料の届け出に関連する臨床指標が収集・解析され、スタッフにはフィードバックされている。教育に関しては、研修計画の統括的な策定や、チーム力向上に向けた研修の実施が望まれる。急性期病院からの紹介患者の受け入れは、多職種でタイムリーに検討されており、地域連携パスも活用しながら、高稼働率が維持できている。

退院後のリハビリテーション・ケアの継続性は、自院の外来・訪問リハビリテーションを含む生活期サービスと連携して、確保されている。退院後2か月の電話アンケートも実施しており、そのデータに基づくさらなる業務改善が期待される。

3. 回復期リハビリテーションに関わる職員の専門性

リハビリテーション科専門医1名を含む5名の医師が、病棟で受け持ち医およびチームリーダーとしての役割を果たしている。今後は、専門医の他の医師に対する支援や、質の向上のための取り組みの充実を期待したい。また、患者・家族への説明・指導の機会も充実されたい。看護師は、おおむね適切に専門性を発揮している。今後、より個別性のある看護計画の策定と更新ができるよう検討されたい。

標準的な評価指標を用いた評価に基づいて、リハビリテーション計画を立案し、適切に介入を行っている。最新のプログラムは情報シートを用いて、療法士間で共有され、更新も適宜行われている。学会・研修会への参加や発表にも積極的に取り組んでおり、評価できる。早出・遅出勤務を導入し、直接朝夕のADLの評価や介入に行われるとなお良い。

社会福祉士は、入院前から退院に至るまで、リハビリテーション・ケアの進捗を踏まえた患者・家族への支援を適切に行っている。管理栄養士、薬剤師は、カンファレンスでの情報発信やミールラウンド、患者指導などを通じて、専門性を適切に発揮している。

4. チーム医療による回復期リハビリテーション・ケアの実践

入院当日に、患者の診察や検査場面などの機会を利用して、各職種が評価を行い、リハビリテーション総合実施計画書が作成され、患者・家族に説明されている。これらの評価結果は「ADL表」として多職種および患者・家族とも共有され、適時に更新されていく取り組みは評価できる。一日平均8単位以上の充実したリハビリテーションが提供され、最新のプログラムやリスクに関する留意点も適切に記載、共有されている。

療法士によるADLの「ワンポイント指導」を、看護・介護職でチェック票を設けて共有し、ケアの統一性を図っている点も評価できる。集団活動や自主練習、季節に応じた行事なども適切に提供されている。リハビリテーションの進捗は「ストラテジーシート」を用いて管理されており、進捗が予測より遅れると、適切に介入を見直す仕組みがある。

入院時・退院時訪問指導は、共に入院患者の5割近い実績であり、生活状況を踏まえたリハビリテーションを入院時より実施する姿勢は、高く評価できる。退院後2か月に患者・家族に電話でインタビューして、退院後の状態を把握している。今後、その結果が病棟のチーム医療における業務改善に活用されることを期待したい。